

Principal Correspondence

茨城の教育環境

小学生のうちは体を動かすことは特に重要とされ,公立小のデータですが 3 年生と 5 年生の運動能力は学力と相関が強いと言われています(「脳には妙なクセがある」扶桑社新書,池谷裕二)。例えば 20 メートルシャトルランは,算数の能力と関係していました。ちなみに柔軟体操と筋肉トレーニングは学業成績との関連は見られませんでした(でも筋力や柔軟性も生きていく上でとても大事であることは言うまでもありません)。

運動には空間認識知能を高め,集中力や学習能力を司る前頭前野を発達させる効果があります。脳が急に発達する小学校低学年は,詰め込み教育をするよりなるべく多くの体験をさせた方が,のちに知能が高くなるのです。



それを裏付けるようなデータがあります。
自然環境や外遊びに恵まれ,運動量が多い茨城の子どもたち…小学生のうちは全国学力学習調査では正答率全国総合 14 位ですが,中学校になると急に学力を伸ばし,国語は小学生の 12 位から 5 位へジャンプ(英語は 13 位ですが)。埼玉や千葉と同じレベルになります。

小学生の自宅学習率は 6 割です。放課後めいっぱい遊び,家に帰ったら宿題に精を出す,オーソドックスなスタイルが身についているといわれます。ちなみに茨城の子どもたちの体力では小学女子,中学男子ともに全国 2 位を占めています(「これでいいのか茨城県の野望」マイクロマガジン社,鈴木ユータ他著)。

ではその後の高等教育はどうでしょう(ここからは私の意見です)。

いまひとつ振るわない。例えば茨城の人口当たりの医者数が全国最下位で,県内からの医大合格者数も少ないので。

災害が少なく,雪に閉ざされるような過酷な気候もないためか(昔から常世の国と言われ豊富な農産物に支えられていた),創意工夫してさらに上を目指すハングリー精神が少ない。

切磋琢磨して刺激しあい,競争することがない…せっかくの成果が中学止まり…

静岡の友人も同じようなことをよく言いますが,これでは困ります。

これから時代,人を蹴散らして競争に勝てとか,単に出世しろというような教育は通用しないのですが,どんなに困難でも簡単に屈することなく,好きな道で創造性を發揮して,新しい価値を創り出し,社会をリードするような人材の育成が必要であり,茨城の教育環境を下支えするひとりとして使命だと思っています。



Principal Correspondence

日本の原風景と宿題のコツ

暑い夏がやってきました。夏は子どもの季節です。活き活きとした実体験が発達期の子どもの脳に良いことは、脳科学者が指摘するところです。

手で書く、声に出して読む、工作で遊ぶ、自然の体験を満喫する…野山や川原を駆けまわる。活き活きとした実体験をして成長した人と、勉強部屋や塾をメインに成長した人では、その後の脳機能に与える影響と脳の本質的な身体性としての豊かさの違いは歴然です。

さらに、夏は「故郷」のおもいで…日本の感性を心に刻む良い機会であります。

お盆に帰った祖父母の田舎。夏祭り。あるいはお盆に来た、いとこ達。

お墓参り、入道雲、雷雨、打ち水、夕涼み。昼下がりのせみの声、海水浴。

夏の情緒、風情を感じる時です。この体験は子どもの心の日本の原風景となり、情緒豊かに成長します。

育脳学童ではスイカ割りや、水遊びなど夏の遊びをたくさん用意して待っています。

ところで、夏休みには宿題という大きな課題がありますが、つい先延ばしにしがちなものです。先人の言葉にある「何事もやり始めた時点でもう半分終わったようなもの。」とはよく言ったものです。能は出力(アウトプット)を重要視するように設計されているので、まず始めることが大切で「始めるとやる気が出てきます。つまり行動するからやる気になる」のであって、ほとんどの場合「やる気になるから行動する」のではないのです(脳には妙な癖がある 池谷裕二 扶桑社新書)。

また、「学習はコツコツやるほうが記憶保持という観点からよい。」というデータもあります。

学習を二日に分けて2回行なうやり方DL(分散学習)と、一日にまとめて一気に行なうML(集中学習)では、学習直後のテストは60点で差はなかったものの、翌日に再テストをすると、MLが20点と前日の3分の1になったのに対してDLでは30点と半減するにとどましたのです。長期的な観点から脳回路により強く痕跡を残すのはコツコツ型がよい。これは学習の途中で睡眠が入るからだと思われます。

夏の生活は時間が乱れがちになりますが、睡眠をよくとて、少しずつでも毎日勉強し、愉しい体験をいっぱいする学童を目指して参ります。

